The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻刻＞知連抄（土橋家旧蔵本飜刻）
Author(s)	
Citation	語文. 1955, 14, p. 32-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68476
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

知連抄

（土橋家旧蔵本飜刻）

知連抄上

抑連歌者歌をもつて皆本とし、先歌の道理をわきまゑて後、こと葉を分て連歌に取なすべし。就中をゝしといへども大がいこれにしかず。歌には六儀十躰あり。これを上下の句にとりわくれば、連歌には三儀五躰あるべし。かるが故に三儀五躰をよく〳〵心得べし。其三儀と云は、一にてには、二に句作、三に寄合なり。五躰と云は明なること葉かく別也。

一に、秋の月の山のはにのぞむがごとし。
二に、舟の遠浪にうきしづむがごとし。
三に、憐家にさゝめ事をするがごとし。
四に、秋風の万葉を吹なびくがごとし。
五に、絵にかける女の、人をなやますがごとし。
以上五躰也。

又三儀のたい一のてにはに付て六の次第有。一に歌てには、二に心てには、三にうけてには、四にかけてには、五にすてゝには、六にとがめてには、此外に三種あり。一にたがひてには、二に乱てには、三にかさねてには、此外にわけてにはとてあるべし。此次第よく〳〵心得て可付。てにはあきらかにせずして、無智無別の人のきはめゑず思ごとし。いづれの行徳によりてかまよひをあきらめ、仏性を勤ぜんや。しやうろむの罪のがれがたし。連歌又これにたがわず。当世人のおもわく、かまくら連歌はよく付、連歌は[そ]ふじてつかね共寄合に心得し事、それうたてしきあやまち也。ことに連歌は細[ゝ]の付合こそおぼえゆれ。日ごろ我も人も心得ざれば、連歌の中にはうやうをしらずして、たゞ花とあれば雲・霞、霧とあれば時雨、雨とあれば雲・曇、寒に雪何と付也。これこそおもて付の連歌にて、しん地なる道にあらず。たゞ当世の心ね、句ごとに心ねをとめて無用のこと葉に心をかけず。又いづかたへも付渡也此事をよく心得てすべし。さなくしては我が句をもわきまへがたし。又人の句をも、真実のしてなんどの句をも聞智事かたし。連歌の風情に心をかけ、身づからわきまえべし。

一、まゑにあかす所のてには、せう〳〵連歌にてふぜい

ををしへ申。

一、　歌てにはと申、たとへば下の句に

やすむ時なき旅の暮かな　と云句に

とをくきてくるしきいきのおのづから

又云　もろくなり行花の夕かぜ　と云句に

うきをしる旅の涙の日にそへて

本歌に云　嵐吹みねの木葉の日にそへてもろくなり行我が涙かな

日にそへてと云句にもろくなり行と付候は、本歌のこと葉也。

二に、心てには、たとへば下句に

さてはこゝろにかなふ山里　と云句に

うきはたゞみやこのとをき事ばかり

此句は都のとをきばかりこそうけれ、さては心にかなふとするなり。

又云　すだれの内の人をとはゞや　と云句に

秋にあふこよひの月のなをあげて

これは心てにはなり。　され共てには[に]あげてすだれの内とうけ取ば、たゞあぐるといふこと葉ばかりにてみなことゞく付也。

三に、うけ取てにはといふ事、たとへば上の句に

来秋の心よりおく袖の露　と云句に

かゝる夕はをぎの上風

又云　通路の路たえはつる庭の雪　と云句に

ふりぬる宿をたれかとふらん

又云　古郷をおもふ旅ねの草枕

むすぶちぎりは夢にこそあれ

これはれうけんあるべし。袖の露にかゝる、庭の雪にふりぬる宿、草枕にむすぶなり、皆々うけとりてにはなり。

四に、かけてには、たとへば下句に

すむもかいなき草のいほかな　と云句に

はやむすべ岩屋のうちのたまり水

上の句のとまり所を下句のかしらにゑひじかくれば、かけ句といふなり。

本歌　住べくはいわやの内に有物を草の枕に心とゞむな

又云　山になりてや霧はたつらん　と云句に

おそくきてゆふべにかゝるけふの道

又云　山にかゝりて雲やたつらむ　と云句に

まよひてはとをくおもひしけふの道

（さしつる戸をもをそくあけけり）

山風のさむきをいとふ朝日かげ

此てにはもうけ取てにはにたれ共、但上下の句によりてかわりたり。まゑの下の句のかしらに上の句のとまり所をゑひじかくれば、かけ句といふ也。

本歌に　朝日さし出とゆふなり。よく〳〵れうけんあるべし

五に、すてゝにはといふ事、たとへば下句に

いなばのうゑに風わたるなり　と云句に

月になる夕べの雲のたち別

（いなばのうへに露ぞしたゝる）

すて人の身ををく山にたち別

此句たちわかれいな葉の山といふ本歌あり。子細なし。これうけてにはににたれ共、たゞ一句にきれぬをすててにはといふなり。

又云　たちつゞきてや雲は見ゆらん

山越て行旅人の一とをり

又云、まへにをしうるがごとく、一とをりたちつゞくとゑひじかくれば、捨てにはといふなり。歌てにはすててにはにすこしにたれども、いゝきらざるを捨てにはといふなり。又いゝきらすを歌てにはといふなり。但思にたるに取なすべし。

六に、とがめてにはといふは、たとへば下句に

心のまゝによしやことかれ　と云句に

ちかづけばとおざかるぞときく物を

身をしらでさのみはしたふ物あらじ

忍にはこぬ夜のあるもとがならじ

此三句はいづれもまへの句に付なり。

（又云　つれなき人のなどやとひこぬ）

あふことも後世まではいさしらず

ならぶ木の花の風ある庭の松

有明の月出るまで待つるに

此句さきの句二句は子細なし。あり明の月につれなきと付事しかるべからず。但これは在明のこと葉つれなきに付、人のといこぬに月出るまでと付なり。又庭の松とゆふはとがめてにはなり。思人ともそれにはあらず。心てにはのわたりにて付也。

本歌に云　植て見る花のならびの庭の松風ふくまでになどや

といこぬ

これにて付なり。此心を渡りてにはと云なり。いま比てにはといふ事、まづ歌てにはにじゆんずるは六しゆのてにはなり。

一、かさねてにはといふ事、たとへば下句に

いたづらにこそ身はなりにけれ　と云句に

月影のひまもるやどのいたびさし

又云　あまりにうきはみやま道の秋　と云句に

袖はよもほすひまあらじ雨そゝぎ

又云　幾度おしきいのちなるらむ

これぞこの人のたづねしいきぐすり

是等のてにははしてはしるなり。しよしんのしては心得がたし。当世よきていなり。

又云　忘れもやらぬ心なりけり　と云句に

立帰り二度むすぶたまり水

これもたまり水わすれもかさぬなり。さらによりあひなし

たゞてにはばかりをよく付なり。〔次ニ一丁欠脱セルモノノ如シ〕

一、　秋の月の山のはにのぞむがごとしといふは、言葉めづらしきていなり。月の山のはを出るはいまだなり。此かゝりをおしへ可申。

おもふことをばへだてざりけり　と云句に

夜のほどは花さく山の朝がすみ

山のはにのぞむなれ共、人のあれこそ花よをいわね共、花あればおのづからしらるゝと也。此たとへめづらしき也。此かたへ取なすべし。

二に、舟のとをき浪に浮しづむがごとしと云は、たとへば下句に

里なき山にとまりかねつゝ　と云句に

浦なみのうかりし舟のおもひ出て

此心なり。さきの句にさとなき山にと云に、その事にてはあらず。うらの浪の舟をよする事まことに心得がたし。されば共これこそまことの当世の連歌の心なれ。まづ思ふべし舟の浪にうきしづみたる風情げにもこゝろすごし。是にて里なき山にとまりかねつゝといふ心なれ。まことにこれも物すごき躰なり。むじやうてんぺんのこゝろなり。

本歌に　世の中をなにゝたとへん朝ぼらけこぎ行舟の跡のしらなみ

三に、隣家にさゝめ事をするがごとしと云は、第一連歌のぎ也。

ありとしらるゝ山の松ばら　と云句に

うら浪の夜行舟に月出て

いましばし梢にのこる夕日影

ふるほどはかくるゝみねに雪きえて

捨し身の尋る人に行合て

今此連歌は先におしへ申候五躰也。其中にすてし身の句、これこそまことの隣家にさゝめ事をするがごとしと云正儀なり。まづ思べし、五ていのなかにより合なし。さして付とも思てには見えず。されば共行合てありとしらるゝのこと葉のゑんばかりにて付たるは、いつものふぜいよりもめづらしき也。又松原の句、りんかにさゝめごとをする事この心ならず。たとへば其事をよそに聞ゆるほどは物もいはぬに、たかくそのことをきこゆるほどはいわぬ（以下十八字モト、イ本カ。マ、）、されば共ふたりはしるなり。これぞ心のそこを付也。しての中にもまさしくこれをわきまゆるはまれなり。さるほどにふしんなりれうけんあるべし。

いやしき身こそあるもしられね　と云句に

月かすむ雲には風のまじわりて

此連歌まへの句に付事、いやしきこそあるもしられねといふに月かくす雲に付、又あるもしられねいふにいやしき心をゆふなり。かやうにべちの事なれども、ことばのたより

にて取よれば付なり。これこそ尤当世のよきてひにて侍れ。よく〳〵れうけんすべし。

四に、秋風の万葉を吹なびかすがごとしと云は、これはさうにわたるなり。野山の草木おなじからず。されども風の吹せくには、いづれしもなびかずといふ事なし。そのごとくまゑの句をすてずして、あまたに今のたとへとする也。

又云 宿の木ずゑやしげりわぶらん　と云句に

暮ぬればそれとも見へずい駒山

此前句は夏なれ共うち捨て、したしきやうに取なしてするをこのたとへなり。

我が宿の梢も夏になりぬればい駒の山も見ゑずなりけり

此寄合にて宿の梢と云句に生駒山と付れば、まへの夏のけしきもみな〳〵付なり。

又云 年のさむきを松ぞあらはす　と云句に

時をゑでつかふる人や見えつらん

これほんもんにいわく

貞松顕(シ)年寒(ヲ)　忠臣見(ル)国花(マヽヲ)　此心也。

霧の上にて山風ぞふく　と云句に

鶯のむせぶこゑかと聞つるに

これ又つねに心へず。きりは秋也。鶯を付事しかるべからず。されどもらふゑひにいわく

咽(ムセブ)ㇾ霧(ニ)山鶯啼(コトヲ)尚少(ワカシ)　此詩心なり。

又云 鳥のねきかばうき別かな　と云句に

つかへつる身には朝をまちつるに

又詩云 鶏既鳴(ニハトリスデニ)忠臣待(チウシン)ㇾ朝(ツヲ)　此心なり。

これもほとけの道とこそきけ　と云句に

なにとなくまぼろしの身にたわぶれて

これは法花経のやうもん云

乃至童子戯、皆已成仏道なり

かやうにおもひのほかのことはひろく付なり。

五に、絵にかける女の、人の心をなやますがごとしといふは、たとへば下句に

はてをもしらぬ野こそ遠けれ　と云句に

草なれば木をふく風をまたきかで

ゑにかける女の、人の心をなやます事はなけれども、こと葉によする也。今の連歌、野の遠に木を吹風をきかぬといふも偽、野にも木、山にも草ありといへ共、たかければ木をたとへ、野は遠ければ草にたとへ、これにて野のはてしらぬとゆふ、木を吹風をまたきかぬと付ば、連歌めづらしきなり。

一、連歌に六の句作あり。一におもひの句、二にわけ句、三にかけ句、四にやり句、五にふぜいの句、六にのけ句也

一、おもひの句とあるは、たとへば下の句に

旅のうきをば何にたとへん　と云句に

ならひとてながき別はなぐさむに

又云 なにをへだてゝとひこざるらん　と云句に

花を見る木ずゑの山の朝がすみ

此句いづれも思の句なり。霞は物をへだつ物なれ共、花の色は梢より見る、なをへだてゝ人はとひこぬ事といふ心ふかし。是いく度もおもしろし。

又云 憑するゑなを涙とぞなる　と云句に

法の師のむかへとらむとゆふぞかし

是又おなじ。まことに浄土へまいりて、我ならずむかゑんといふはうれしけれ共、一段の別はいかばかりかなしからん。されば共たのむ方も涙とぞなる、これしんぢなればおもひの句となり。

二に、わけ句といふ事、たとへば

あるゝ宿にも海士や住らん　と云句に

つなぐやの所なきかなはなれ駒

これ当世の連歌なり。あるゝに駒、住に心なきを付也。あまたの連歌の心にてはなけれども、たゞよりあひばかりにて付なり。此心はのけ句ともいふ也。

又云 木がくれを見れば落葉やつもるらん　と云句に

嵐になりて雪ははれけり

これ又木がくれの落葉にはあらしを付、つもるらんに雪を付也。ふるき躰にはきらひしなり。落葉は神無月の物なり雪は冬ふかき事を付ば時せつたがふとて付ざりしなり。いまは此なりはなし。

三に、かけ句といふ事、たとへば

かゝる方にはひとりこそあれ　と云句に

うき世をばへだてし山のみねの雲

又云 此おく山はすむもかひなし　と云句に

それまではくだりてくまぬ谷の水

此心はかけ句といふ。この奥山は住もかいなしといふ句は人すみたれども水取なして谷のそこまではくだりてくまぬといふ。これかけ句なり。則寄合也。

四に、やり句といふ事、これ人のあやまる事なり。つまる所をするをやり句と心得たり。そうじてさにてはなし。それは分句と申也。やり句と云は

舟行すゑのおきつしら浪　と云句に

山にきて見ればやとをくかすむらん

いまだ見ぬ方をかやうにおもひやりたるを申也。又遠見の躰をもゆふなり。これを海辺の風情面白し。舟の奥津白浪と云はまことにまん〳〵としたるていにて、ほとりもなくきわもなきありさまなり。山より見れば遠くかすむと付ばめづらしき也。

又云 とをく聞きつる浦の人おと　と云句に

此山のあなたはいかに霞らん

月の入山のあなたやかすむらん

舟の海すへも山にや留るらん

へだてつる霧は月にやはれぬらん

月にこぐ舟路も山もおぼろにて

此心はいづれもおもひやりたるふぜいなり。かやうにするてにはおゆふ也。

五に、風情句といふ事、これも人のあしく心得たり。ふぜいといふはより合のすがたとおもふなり。それにてはなきなり。

野中の松に雨かゝるなり　と云句に

草よりもうゑに見えたる露ながら

風に又木下露をおきそへて

これこそふぜいの句にて侍れ。松は草よりも上とゆふ言葉にて、雨も野中も風情珍付なり。

又云 それと見えたる松の一むら　と云句に

浪よりもあなたの浦に夜の明て

又云 入月に夜舟の末やしらるらん

又云 花ちりし風は青葉に留ゝまりて

是つねよりもよきふぜいなり。当世はかくのごとくのふぜいをこのむとおもへり。

六に、のけ句これに二の心あり。つまる所を付るをもいふなり。又はつまらねどもよそなる方へ付るをもゆふなり。たとへば

日は見へながら時雨行なり　と云句に

ふりはつる身は人数にまだ入で

これこそのけ句にて侍れ。此連歌むねと当世のふぜいなり

これはよりあひなけれ共、入で日は見へながらと付也。ふりはつる身は人数にまだいらでと付なり。

又云 草よりも上に見へたる萩の風　と云句に

老そふ年やなかばなるらん

これ又同。萩の葉といふに半葉のこと葉子細なし。一句述懐にてよく付たり。たゞ連歌はこのをしへにて、よく〳〵れうけんあるべき物也。

知連抄 下

抑近来の上手と云は救済・周阿也。侍公風躰者こと葉直に云て、更に求所なし。かんのふてんせいの上手也。詩の心を連歌に取なし、かゝり幽玄にして

雨にちる花の夕の山おろし

月残るかり庭の雪の朝ぼらけ

鶯のこゑをも友と山こえて

かやうの躰をありのまゝに花□して、寄合を細□に付也

周阿の躰は同寄合なれ共一かどなくてはせざりしなり。されればあながちに寄合に目をかけずして

やみを待いさりのあまの月ねて

朝風の萩を夕に吹なして

山本の嵐の上に鴈なきて

松原のうす雪までに風吹て

句毎にかやうにせしなり。愚躰は侍公にも周阿にも同心にせしかども、不堪にして更に本様などに出すべき事にてはなけれ共、請方の連歌を見るに、四五十万句にもすぎて侍るらん。然ども其中に意地の連歌十句にすぎじとおぼえ侍り。或は座敷の物忿にして不叶、或は人にこされて更に意地の連歌なし。一年大原野にての発句に

いづれ見む嵐の紅葉松の雪

しほくみの雨の日ばかり袖ほして

とはれしは中〳〵にうき別にて

のこる身を見る人もなをつれなくて

忍には月ざゑ人の関路にて

いる時は月にも山のかくされて

老は中〳〵人にをくるゝ

これならでは我があて所あるとおぼゆる句はせざりしなり東西の遠国に我しすてたる懐紙なんど下たらむを見ては、聞よりもをとりておもふべき也。近年人の吉躰とおもふは大略周阿の意地をまなべり。されば此十ヶ年の間、連歌諸方点をこひしを見て、よき連歌とおぼゆるはみな周阿の風躰也。この比の連歌はたゞ人をおどし、上にてはよく聞て下には更にわが力の入たるはなし。されば上手の連歌を聞しらでなり。句ごとに珍敷もあり、百度千度したらん連歌にも侍れ、二三句までもあらんは珍かるべし。よく〳〵れうけんあるべし。

連歌に三種あり。上中下也。先上品の連歌はすへの人のおもひよらぬ事をはじめて申出なり。風躰あくまで新敷、こと葉は幽玄に、かゝりおもしろかるべし。いかなる上手も一座に一句二句若は三句の外は、みゝにとまる句はなき物なり。一年田舎よりてんをこいし中に、上品とおぼえしき句侍し。おもひ出、かき侍也。

雪間かくして又やふるらむ

此句尤よきすがたなり。雪の字一をもつて又やふるらんとなり。

中品の連歌は心めづらしく引返て、かゝり面白、花・月・雪のつねとある連歌を一かどあるやうにする也。

下品の連歌は風情あくまで古物にて更に珍こと少もなくして、賀茂のまつりに百度千度渡りたる物のごとし。我こそいみじく寄合をおぼえたれど、ひばらとあればくもる、都と云ばさが、萩といへば山もとなんど云て、執筆いまだ筆をもおかぬに付たりなんどする事あまりに〳〵口惜事也更に当座の我が恥をも帰見ず、一座のそんじ行をもしらずなり。

寄合は先立したらん事は申に不及、我と新敷見出たらんこそ殊更面白き事にてあるべけれ。万葉なんどこそ事ひろき物なればたやすくも侍ね、古今以来の八代集の内はなどか稽古せんに叶ざらん。但初心の人はさのみみゝおき寄合をこのむべからず。源氏・万葉のよりあひ一座に三度の外

はこのむべからず。寄合のめづらしきよりは心の珍こそ面白く当座も侍れ。

今時の連歌は上の五文字をもつて下まであひしらふやうにする也。さなければ上下はなれ〴〵になる也。たとへばあづさ弓引とつゞけて、又とまり所の五文字にて少と弓のあいしらいあるべし。又下句はめづらしき風ぜいしよせんなし。一かどあるやうに幽玄にあるべし。

連歌はさのみ心のしづかなるも不叶、又物忿にても不叶也。先連歌を出さんと思はん時は、上座をよく〳〵見つくろいて出べし。或は少人又は客人なんど句を持たらんすがたをうかゞいて、あふぎをなをして、執筆のあたり二三人のみゝに入やうにこゑをやわらかに出べし。又連歌の上手はしたに吉物をきて、上におびしたるやうにする也。たゞし初心の時はおびせぬやうにもする也。さればとてうはうに、どこともなきもわろし。大ちたかくやさしきは連歌のあがるさうなり。初よりしたゝめたる様にこせ〳〵とするは連歌あがらず。先人の句出したらんをよく〳〵聞て十方に心を廻て叶はざらん時、いつもの寄合をすべし。是も又人によるべし。上手の事なり。

点は人による事にてあれば、たゞ句がらをたしなむべきにや。此事を度々申侍れ共更に人のもちいぬ事なり。上手も点者によりてかわる也。

連歌には小宛と云事有。三あるべし。先心のこあて、寄合のこあて、詞のこあて也。たとへばみ山と云に烏を付るは子細なし。夜の明と云に烏を付わ鳴躰をすべし。これは心の小宛なり。次に寄合の小宛と云は、たゞつへと云句に梨と付るは子細なし。親の子をうつ杖には梨を付は大にちがふべき也。次に詞の小宛と云は、老の浪とせんと思とも前の句に帰るとも立共浪の肝要の詞なくば浪の字取出べからず。これにてよく〳〵れうけんあるべし。

今時の連歌は余に輪廻の句の躰、珍からず。仍而応安第五式目に准じて少々しるせり。又同第七暦神無月大原野の千句の時注文。

影に木下の字同、月・ほしの影各別也。

一、別にとまる　帰るにとまる　別になごり　行にとまる

つゝむに忍　独ねに別　文に詞　文字文　文に水ぐき　なくに涙　袖の露に涙　別に帰　以上十三句、付句打こしをきふべし。

一、やらん　せん　けん　からん、此四のてには、とまり所にすべからず。中においてはくるしからず。一句の躰にしたがふべし。但とめ所にても誠をもしろからんは子細なし。都に堺　くずにうらむ　須磨の山里に入相　親に子おく山に鳥音　老に若　悦にうき　たのしみにうき　うれへにかなしみ　なげきにかなしみ　以上不可付也。在明の月とあらんにつれなきと不付候。但有明とばかりあらむに可付。たきつせにおつる　ひゞきになかるゝ　たきにたき

の名不可然候。又たきにながるゝ・こほり不付。但句によるべし。夢にまぼろし・面影不付。但句によるべし。都にもゝしき　大宮に大内　九ちうに大君不付。名のある都に秋風・白河を不付。　雲の花・心の花と云句におもかげ不付。遠山に近を付ず。急に早不付。　打越きらふべし。　心やくそく也。

一、待恋に別　夢にねざめ　恋に述懐のこと葉は子細なし。述懐に恋の句不付。待・別と云句に夢不付。独ねに夢同。懐紙の内に落花として又桜のちるともせず。山路に移ふ菊不付。忘と云句になさけ・したふ不付候也。ざり　けり　ざれば　ざるらん、これをこのむべからず。かまくら連歌のてにはなり。秋の鴈に一行と不付。春のかりに数不付。又つれなきにおそきも皆々不付。　須磨の出舟、　旅にあらず。涙に身をしる雨不付。身をしる雨と云句にひそかにと不付。天川に舟をむすびては水辺にあらず。秋也。名所なり。藤ちるは夏也。梅の宮のまつり、春なり。今はなし。柳取は夏也。たゞは雑也。あかむすぶは夜なり。おこなふにつとめ不付。春のこほりにとくると不付。冬のこほりにくだく不付。草木を一句にしては両方へ三句きらふべし。み山桜とあらんにつねの寄合不付。月なくして夜舟、都の富士半は時しらぬ、むくひに先の世、からすと云句にさぎと付て又入と不付。吉野と云句にもろこしと付て松浦・枕共夜留共せず。冬の雨に山めぐり不付。はるゝにあかき不付。すさまじきと云句に身にしむ不付、風ともすゞしきとも不付、打越にさむき不付。水の花は夏也。しきみつむは夏也。花の水取、夏也。尺教也。浅深き不付。以上七十三句嫌物。

舟路にかねのきこゆるなんど云事不可然候。なにわにては可付。鳥の春に海辺・川に不可然也。

十三句のきらい物昔に少かわる也。〔次ニ一丁欠脱セルモノ、如シ〕

駒のせき、生物にあらず。鹿鳴草、生物。秋にあらず。ほやなくは秋也。植物也。日吉まつり、夏なり。つくばのまつり、秋なり。賀茂のまつり、夏也。神まつり、夏也。春日まつり、春なり。二月なり。すはのまつり、秋。七月也。

連歌の病事、たとへば五文字のきれにてと留て、おわりのとめ所に、や　に　む　る第一の病也。くつしも同かなり。是にて心得べし。

同詞の病之事

山陰は月に哉影のまさかくるらん（二字モト、イ本カ）

影と云字かわれ共、二あるてにはこし、字の病なり。

片句の病の事

月にだにいとわぬ花のくもりかな

月の夜も花に明るといそがれて

此二句の連歌はいづれも病なり。花くもるはおもしろけれ共、月はいたづら事と聞ゑたり。これを名付て片題の病と云也。今連歌に片句の連歌と云事心得べし。

落句の病の事

夕暮は別し花を月に見て

是又花は面白。月いづれもわきまへがたしといへども、春は花、秋は月お用ゆべきに、此心は月なからむ夜の花はいたづら物と云なりや。歌には落題の歌と申は、たとへば月の前の花共、花の下の月共、二つ物を賞々翫々一つをばつぎになす事を落題とは云也。歌には八病あげてさたしたれば、此連歌には四病を挙て申也。

連歌の五韻連声・五韻相通と云事あれば、歌にも連歌にもかわらぬなり。歌にはこれを以、大なる秘事と申也。先連歌の趣者詞のたよりを五七〳〵に置て、その声のする〳〵とくだる様につゞくるを五韻連声とは申也。又五韻相通と申は詞さほどつゞかね共、五七五のきれめに五韻のひゞきの字を置を五韻相通と云申也。されば此二種をはなれて連歌をしたるは、只死人の如。喩を出してこれを可申也。人の形は生たるも、死たるも其六根五躰は更に相かわらず。されば共死たる物はかひなき故に、いたづらに朽ぬ。今の連歌又是にてしるべし。更に連歌たる姿なし。是にてなどかれうけんなからん。又五韻連声の趣は、霞・煙・雲なんどの立つゞくなんどの云ゑんの詞を以、連声とは云なり。いづれもこれにて心得べし。次五韻相通と云は大事也。凡連歌の切めにあらんずるてにはの字のひゞき同か様に字の置おくなり。五音名同注也。

あいうへを　かきくけこ　さしすせそ
たちつてと　なにぬねの　はひふへほ
まみむめも　やいゆへよ　らりるれろ
わひうへを

此五韻のおわりの か なに吉連歌はあいて、あいうへおのひゞきあり。これを皆五韻相通の連歌也。是は連歌には大事也。連歌しの中にも此事をよくしる物はすくなし。連声の句は相通の句よりはすこしやすし。先連声の姿を連歌にて教申也。

うき雲のたちいに老のかなしくて
雲のたつ煙に山の松見えて
さく花の雲や梢をうづむらん

これは五韻連声の句なり。是にてれうけんあるべし。又五韻相通の句、たとへば

遠山や越過てだにまよふらん
奥山や待れて月に深ぬらん
ちる花や又面影に帰るらん

此三句は相通して、あひうへをの三処のかなによく置とたり。但あいうへをの五の内は何お上にしても五韻相通の句なり。更に今時のしても是を智らず。たま〳〵しりたる物

もこれを心にかけず。正躰なき事也。

旅人やちらぬ花にもわかるらん
ちる比はさかぬ木にさへ花を見て

北山やむろのとぼそは月もなし
山人やおのれと花に暮すらん

木こりだに夜る帰には月待て

是等はみな五韻相通の連歌なり。惣じて上手は皆五韻相通を心にかけてする也。是即奥蔵也。至極秘事也。連声は詞なれば上をかざり、相通は内をかざる也。たとへば連歌相通は但父母のごとし。初心にて連歌を心にかけて上手に成て後、相通を宗とすべき事也。周阿殊に相通を心にかけてせしなり。救済も又如此。当世の連歌の風情を歌にて申也。

とまりつるよの間の舟にふりつみて
嶋のかげより雪ぞ出ける　救済法師

ふりうづむ松の姿や物ならん
ふもとにたかき雪の一むら　周阿法師

此二首の歌いづれもおもしろき姿也。愚躰もたゞ同物にて侍れ共、当座うかみ候まゝ一首

おもひきや此山里の柴の戸に
花をあるじとはるべしとは

かやうこそ連歌の趣はあり度候へ共、更にかやうにする人はなし。歌の道もすたれ、連歌のすきもなく候へばうたてしき事也。これは連歌の道には随分の秘事を書抜候。相構〳〵ふすきの方へは見せられま敷者也。

抑此心抄者、云応安第七　二条殿大閤依当閤白殿之御所望、抽和歌肝要被遣之也。周阿九州下向之時、最初計御草案之時分申下令所持〻〻。但上落之時被召返於御前焼失畢。然共聖護院の竹園御数寄之間、嘉慶元年十一月名世風躰此心抄二通被書献也。当道奥儀口伝不可過之。可秘〻〻。

永正七年庚午五月晦日　之書畢

知連抄飜刻附記

本書はもと大阪、平野の土橋家に襲蔵されてゐたものであるが、先年同家の図書文書の大部を本学文学部で購入した際、同じく文学部の有となつた。土橋家旧蔵の連歌関係書中には注意すべきものも少くないので、一部は本誌第十二・十三輯に略解説をつけて紹介したが、更にその中からいづれか研究上有意義な一本を選んで飜刻しようと考へ、本書をとることにしたのである。

知連抄は二条良基の著作とされるが、その成立や性質についてなほ若干の疑問がいだかれてゐる。それには未だ信頼できる善本の見つからないこともあづかつてゐるであらう。本書も善本といふには誤脱が多すぎるが、しかし今のところ最も伝来の明らかな図書寮本の系統の注目すべき一写本と思はれる上、はやく土橋家に在る頃から一部には知られながらも一般にはなほ未知に等しい状態にあるので、あへて活字にするのである。

本書の特色は右の第十二輯「土橋家旧蔵書目録（一）」の該当項目（四六頁）に略記しておいたが、上巻は東北大学本に、下巻は図書寮本にことに近く、要するに後者の系統に属してしかも上下を具へた完本といふべきものと考へられる。それについては詳細な考証を示さねばならないが、そのうち知連抄のもつ若干の疑問を対象とした論考で本書にも詳しくふれる機会をもたうと思ふので、暫らく前の解説にゆづつておきたい。

本書は永正七年の奥書ある写本一冊で、美濃袋綴。墨付三八枚。内上巻二〇枚、下巻一八枚に分れる。まづ第一紙左上に「知連抄上巻」と表題を記し、第二紙に内題「知連抄上」とあつて本文が始まつてゐる。本文は一九枚で、八枚目の次に一枚の脱葉があるらしい。本文の終りには遊紙一枚を置いて、次に左上に「知連抄下巻」と記し、紙を更めて内題「知連抄下」とあつて下巻の本文が始まつてゐる。本文は一六枚で、その一〇枚目の次にやはり一枚の脱葉があると思はれる。本文の末には奥書一枚があり、表に文、裏中央に一行で書写年月日を記す。最後に裏表紙として一枚をつけてゐる。今は中央右端を麻糸で結んであるが、綴ぢ直しの痕が見え、前記二枚の脱葉もその際のものであらう。

本文は八行書きで、字間・行間には本文と異る書体で書き加へられた字句がかなり多い。それは本文中の誤写・欠脱を勘へ、仮名遣を改め、仮名には漢字、漢字には仮名をあてる外、不備の助詞を添加したものであるが、他本との校合に基くものは少く、殆んどはその筆者の読みを示すものと思はれる。それで飜刻からは除外し、できる限り原形のみを移すことを方針とした。しかし書体の識別にまよふ箇所もまゝある。

本文と同筆と認められる訂正は本文中にいれ、他本による校異であることの明らかな字句は（　）でつゝんで残した。虫損其他で判読に苦しむ字句は□でつゝみ、明らかに誤写と知られるものにはマ、と注しておく。仮名遣は原のまゝであるが、異体字は統一した。その点漢字も同じ。句読点・清濁の表記は原にはないけれども私案によつてつけ、字配り・行の改め方も多少読み易いやうに変更した。まだ朱の圏点や合点で字句の区切りを示した箇所も多いが、原のものか疑はれるので削除した。

校訂者　田中　裕